

選択的評価事項に係る評価

自己評価書

平成22年5月

新潟県立看護大学

目 次

I	大学の現況及び特徴	1
II	目的	2
III	選択的評価事項B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況	3

I 大学の現況及び特徴

1 現況

- (1) 大学名 新潟県立看護大学
 (2) 所在地 新潟県上越市
 (3) 学部等の構成
 学部：看護学部
 研究科：看護学研究科
 附置研究所：看護研究交流センター
 関連施設：附属図書館
 (4) 学生数及び教員数（平成22年5月1日現在）
 学生数：学部 371人，大学院 15人
 専任教員数：44人
 （うち助手数：7人）

2 特徴

1) 地域の地理、歴史

新潟県は、本州の日本海沿岸のほぼ中央部に位置し、朝日山地、飯豊山地、越後山脈が東側に連なり、西側には妙高山などの山々がそびえている。また信濃川や阿賀野川などの大河をはじめ、数多くの河川が日本海にそそぎ、越後平野、高田平野など広大で肥沃な平坦地を形作っている。また、佐渡島、粟島の島嶼も有し、県内陸部は有数の豪雪地であることが知られている。

人口は240万人、面積約12,600 k m²で、約600km余の長い海岸線を有している。

本県は、全国トップブランドのこしひかりを生産する全国有数の米作地帯であり、チューリップなどの花卉栽培や、米菓、ニット、精密機械などの産業が盛んである。

歴史的には越後国として、戦国時代の名将上杉謙信公が治めた地であり、江戸幕末の5開港の一つであり、日本海側唯一の政令市である新潟市を県都として発展した日本海側の中心地である。

また、本学が所在する上越市は、新潟県の西部に位置し、古くから高田地域は城下町、直江津地域は交易港として栄え、豊かな自然と歴史に育まれた地域である。

2) 本学の変遷

新潟県は、平成6年4月に看護職者不足の解消と質の高い養成を目的として新潟県立看護短期大学を設置し、短期大学完成年次の平成9年度には、地域看護学専攻と助産学専攻の2つの専攻科を設置した。一方、この年3月に県は「高等教育機関の整備に関する懇談会」を設置し、この会の報告書の中では、「本格的な高齢化社会に対応して、本県が全国を先導する人材を育成していくためには、全国の先進モデルとなりうる教育研究課程を備えた福祉保健系大学の充実、強化が求められている。」との提言がな

されている。さらにこの年の9月には県看護協会等県内看護職能団体から看護大学を設置するよう要望書が出された。これらを受けて県は、平成12年3月に「県立看護大学設置検討委員会」を設置し、検討を進め平成13年2月に「新潟県立看護大学基本計画」を策定し同年12月に大学設置認可を受けて、平成14年4月に看護学部看護学科の一学部一学科の単科大学として開学した。また、更なる上級看護職者としての能力向上に寄与することを使命として、平成17年10月に国の設置認可を受け、平成18年4月に大学院看護学研究科修士課程を設置した。

3) 本学教育の特徴

- ① 入学初年度から地域社会の人々と交流するプログラムを組み込み、生活者に対する洞察力・創造力を育む。
- ② 学部1年次より段階的に専門科目、実習科目を開設することにより、地域及び地域生活における営みに対する理解を深め看護学への関心を連続的・統合的に高めていく。
- ③ 1年次より少人数ゼミナール及びPBLチュートリアル演習教育(ふれあい実習)を導入することで、質の高い対人交流能力を付与するとともに学生の主体的な知的探求を確保するための学習時間を全学のカリキュラム編成過程で導入する。
- ④ 専門科目群では、看護技術のスキルトレーニング及び自習環境を整備していく。
- ⑤ 学生への実習に対するインセンティブを高めるためふれあい実習発表会、継燈式、卒業研究発表等学生の自発的なプランニングと公开发表を推進している。

4) 教育組織の特徴

- ① セメスター制、GPA制度を導入し、学生の主体的学習が動気づけられる指導、学生のみならずに対する指導を図る。
- ② ゲストスピーカー制度を導入し、スキルトレーニングを要する科目や科目スペシャリストを招聘し、授業の充実を図る。
- ③ 臨床教員制度を導入して、臨床実習病院関係者を臨床教員として認定し、臨床指導の充実を図る。

II 目的

1 建学の理念

本学の建学理念は「ゆうゆうくらしづくり」である。この心は、新潟県が21世紀最初の長期総合計画において策定した3つの施策体系の精神を受けて、県民のくらしに融け込み、各地のヘルスケアのニーズにバイタリティをもって独自の・創造的に、かつ、自由と自律の精神をもって、教育・研究にゆうゆうと励み、地域とともに邁進する大学に発展することである。

2 本学の使命

「地域文化に根ざした看護科学の考究」を大学の使命とし、新潟県の社会文化資源や日本海を中心とする世界貿易を見据え、個人、地域、国際社会それぞれの文化に「在る」ヘルスニーズに対応できる教育・研究に努めるとともに、資質の高い看護人材の育成を通じて地域に貢献する。

3 教育理念

生命の尊厳を基盤とする豊かな人間性を醸成し、自己及び他者への深い洞察力をもって自己成長への志向を育むとともに、基礎的・先進的な知識と技術を教授することにより、多様に変化する人々の健康と福祉のニーズに柔軟に応じうる人材を育成する。

4 教育目標

- ① 生命の尊厳を感受し、自己への深い洞察力と物事への豊かな想像力に根ざした倫理観を培い、人々の喜び、痛み、苦しみを分かち合い、自己の持てる力を行動に移す能力を養う。
- ② さまざまな個々に異なる健康状態の人々と関わることのできる基本的専門知識と技術を習得し、学理に基づいて対応できる実践的問題解決能力を養う。
- ③ 社会情勢の変化や科学技術の発達に主体的・創造的に対応して生涯学習を継続・発展させる態度を養う。
- ④ 保健・医療・福祉の分野における他職種と協働・連携し、自己の専門性に対する誇りと責任感を持ち、可能な限り利用者のニーズに専心する態度を養う。
- ⑤ 専門職として国内外を活動の場とできる国際的視野をもった調整能力やコミュニケーション能力を養う。
- ⑥ 研究的態度を身につけ、看護学を発展させ、看護の専門性を向上させていく能力を養う。

IV 選択的評価事項B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況

1 選択的評価事項B 「正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況」に係る目的

本学の建学の理念は、「ゆうゆうくらしづくり」である。この心は、新潟県が21世紀最初の長期総合計画において策定した3つの施策体系の精神を受けて県民のくらしに融け込み、各地のヘルスケアのニーズにバイタリティをもって独自の・創造的に、かつ、自由と自律の精神をもって、教育・研究にゆうゆうと励み、地域とともに発展する大学に邁進することである。

この建学の理念をうけて「地域文化に根ざした看護科学の考究」を大学の使命としている。すなわち、新潟県の社会文化資源や日本海を中心とする世界貿易を見据え、個人、地域、国際社会各々の文化に「在る」ヘルスニーズに対応できる資質の高い看護人材の育成を通じて地域に貢献することである。

これらの建学の理念と本学の使命に則り、資料B-1-1の如く「多様に変化する人々の健康と福祉のニーズに柔軟に応える人材育成」と「地域に根ざした看護科学の考究の推進」を教育の目的としている。これらの目的は、今日我が国の大学一般に強く求められている社会的要請でもあり、いずれも大学の正規課程の学生以外に対しても提供されるべきものである。本学においても開学当初から、地域に根ざした実践的研究を進める中で、本学の有する教育的資源の有効活用を考えながら、以下の6つの取り組みについて「正規課程の学生以外に対する教育サービス」を実践している。

- [1] 科目等履修生の受け入れ
- [2] 公開講座等の開講
- [3] 研修支援
- [4] 文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」採択事業（どこでもカレッジプロジェクト（通称：ドコカレ））
- [5] 図書館の開放
- [6] 地域への情報発信

資料B-1-1

（目的）

第1条 新潟県立看護大学は、教育基本法（平成18年法律第120号）及び学校教育法（昭和22年法律第26号）に基づき、生命の尊厳を基盤とする豊かな人間を醸成し、自己及び他者への深い洞察力をもって自己成長への志向を育むとともに、基礎的・先進的な知識と技術を教授することにより、多様に変化する人々の健康と福祉のニーズに柔軟に応える人材を育成し、「地域に根ざした看護科学の考究」を進めることを目的とする。

第6条 本学に、看護研究交流センターを置く。

出典：新潟県立看護大学学則

2 選択的評価事項B 「正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況」の自己評価

(1) 観点ごとの分析

観点B-1-①： 大学の教育サービスの目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が周知されているか。

【観点到る状況】

[1] 科目等履修生の受け入れ

ヘルスケアに対する県民の多様なニーズに応えるため、また本学の有する教育的資源の有効活用を考え、本学の正規課程の学生でなくても、特定の授業を履修することを希望する者を科目等履修生として受け入れる体制を開学当初から整えている（別添資料B-1-①-1 及び-2）。大学院においても同様に、平成18年に学則並びに科目等履修生規程を設け、正規課程外の希望者を受け入れている（別添資料B-1-①-3 及び-4）。

別添資料B-1-①-1	新潟県立看護大学学則 第12章
別添資料B-1-①-2	新潟県立看護大学科目等履修生規程
別添資料B-1-①-3	新潟県立看護大学大学院学則 第12章
別添資料 B-1-①-4	新潟県立看護大学大学院科目等履修生規程

[2] 公開講座等の開講

本学の研究成果を地域に還元し、また県民及び保健医療福祉関係者に対する支援と県内の保健医療福祉の向上に貢献することを目的に、本学に看護研究交流センターが設置されている（資料 B-2-1）。これらの目的を達成するために、本センターを中心に公開講座等を開講している。これらの講座の基本方針および実施計画は、本センターを中心に定められ、本センターが地域に対する主要な窓口として機能している。

(1) 看護研究交流センターの生涯学習・研修支援部会が中心になって公開講座を企画してきた（平成22年度からは同センターの「先駆的学習支援部門」が所管）。講座の内訳は、特別講演、広く県民を対象とした一般公開講座、看護関係者を対象とした専門公開講座、市町村の要請による出前講座の4種類である。開講に当たっては、本学ホームページ、新聞、市町村の広報誌、また関係機関へのパンフレットの配布およびポスター掲示等によって県民に広く周知している。

(2) 地域貢献事業の一つである「看護大学いきいきサロン」を看護研究交流センターの地域貢献部会が中心となって実施している（平成22年度からは同センターの「地域社会貢献部門」が所管）。この取り組みは地域住民を主として対象とし平成21年度から実施している。サロンの目的は、本学の建学の精神である「ゆうゆう暮らしづくり」の実現に向けて、看護・医療・福祉関係従事者と地域に暮らす人々とが健康や病気について気楽に話し合い、交流を深め、それによって生活の質を高めることである。サロンの案内は、本学ホームページ、新聞、市町村の広報誌、また関係機関へのポスター配布等によって地域住民に広く周知している。

資料 B-2-1

(目的)

第2条 センターは看護科学における教育と研究の成果を地域に還元し、県民及び保健医療福祉関係者に対する学術支援並びに生涯学習・研修支援活動を通して、県内の保健・医療・福祉の向上に貢献することを目的とする。

出典：新潟県立看護大学看護研究交流センター規程

〔3〕 研修支援

看護教育に必須の臨地実習は、学外の病院等に勤務する多くの看護師の協力と指導により成り立つ実践教育の場である。これらの実習の場で直接学生を指導する立場にある看護師、すなわち臨地実習指導者は、臨床家であると同時に教育者であることを要求される。新潟県ではこれらの指導者を養成するために毎年講習生 40～50 名を募集し、「臨地実習指導者養成講習会」を開催している。この講習会に本学教員の多数が講師として参加している。平成 16 年から 19 年の 4 年間は、本講習会を本学にて開催し、全面的に支援した。平成 20、21 年度は、学外で開催されたため、講師のみを派遣した。

〔4〕 文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」採択事業（どこでもカレッジプロジェクト（通称：ドコカレ））

看護職者の新入職後の短期間での離職率の高さは、現代の医療界の抱える大きな懸案の一つである。また離職したいいわゆる潜在看護師の再就職は、就職先の内容を吟味しなければ容易であるかもしれないが、それによって看護師自身が持ち続けている本来のキャリアデザイン（自分がこうありたい、と願っている看護師像）を実現できるかどうかはかなり難しいといえる。意欲ある看護職者のための「再挑戦」の機会拡大は、看護師教育に携わる看護大学の特筆されるべき課題と考える。潜在看護師の現職復帰意欲を促進させるには、単なる「座学」学習ではなく、自らが選択し、参加する成人教育型の問題解決プログラムが必要である。それゆえ本学では看護職の「学び直し」の場を提供することを目的に、看護職者のために開かれた大学（オープン・カレッジ）と Web を利用していつでも学習できる環境（バーチャル・カレッジ）とを併用した生涯学習（教育）課程の構築を目指した（資料 B-2-2、B-2-3、別添資料 B-1-①-5 および-6）。

本取り組みは、平成 19 年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に「看護師の学び直しを支援する学習プログラム」（通称：ドコカレ）として採択された。「ドコカレ」は、平成 19～21 年度の 3 年間のプロジェクトである。

本プロジェクトの最も大きな特徴は、インターネット環境があれば、いつでもどこでも何度でも本学の講義を受講できるという e-ラーニングを可能にしたバーチャル・カレッジを開設したことにある。この環境を整備することにより、県内はもとより全国どこからでも本学の提供する講義を受講でき、再就職を目指す意欲ある潜在看護師の再挑戦の機会拡大を図った。平成 22 年度からは本学卒業生も含め、対象をより広く拡大し、リカレント教育の場を提供することを目的に、本センターに「看護職学習支援部門」を設置して本プロジェクトの継続を図っている。

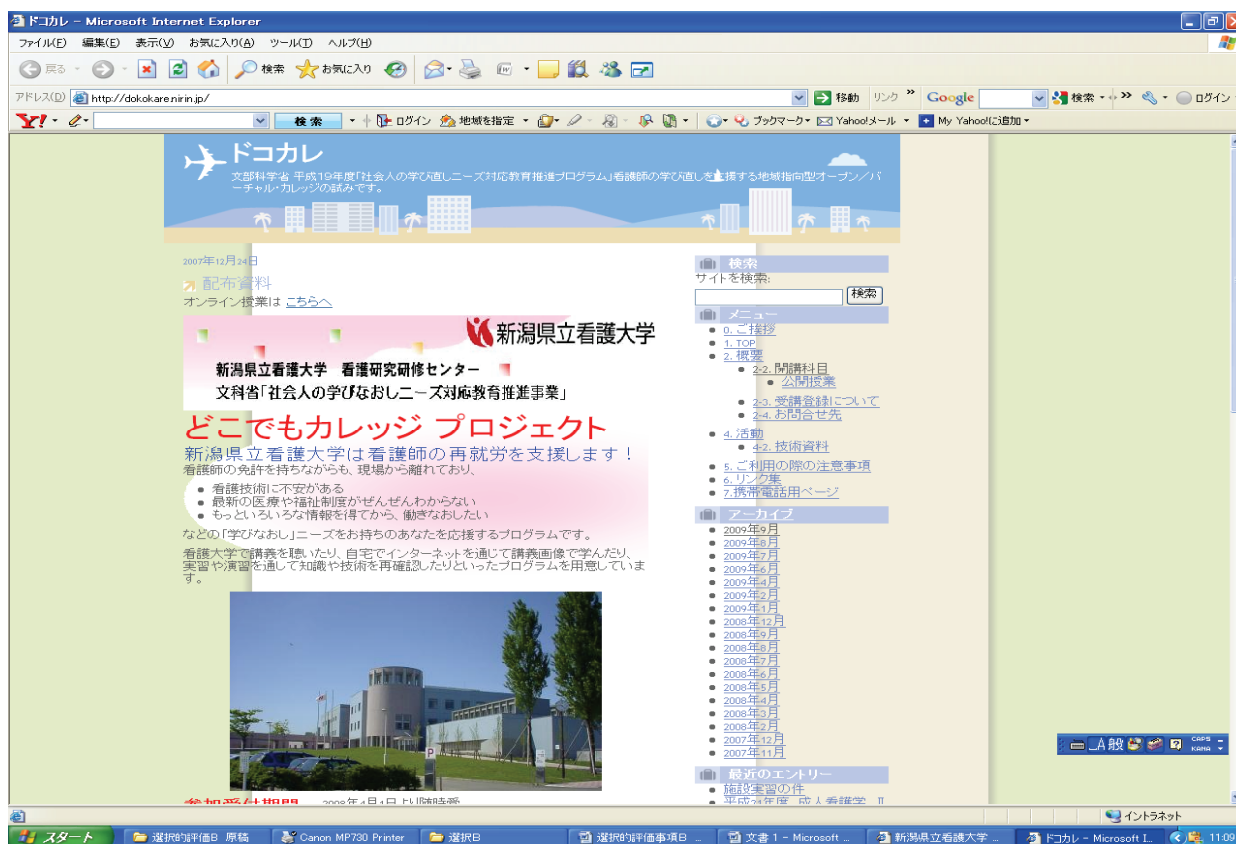
資料 B-2-2

（目的）

子育てなど様々な事情により第一線から離れている看護職の「学び直し」の場を提供し、再び臨床現場へと戻れるよう支援することを大きな柱としています。また、学び直しの観点から、最新医療や看護に関して学びたいニーズを持っておられる現役の看護職にも門戸を開いて支援します。

出典：新潟県立看護大学「どこでもカレッジプロジェクト」パンフレット

資料B-2-3 「ドコカレ」のホームページ



(URL : <http://dokokare.nirin.jp/>)

別添資料B-1-①-5	「看護師の学び直しを支援する学習プログラム」平成20年度～平成21年度
別添資料B-1-①-6	看護師の学び直しを支援する地域指向型オープン/バーチャル・カレッジの試み 平成19年度成果報告書

[5] 図書館の開放

本学図書館は、その使命の一つに地域貢献を掲げ、保健・医療・福祉等の関係者に広く開放し、地域の保健医療福祉の向上に寄与することを目的とした。そのため開学当初から、学外者の利用規程を定め、保健・医療・福祉等の関係者およびそれらに関する調査研究を目的とする学外の方に図書館を開放してきた(別添資料B-1-①-7及び-8)。平成14年度には上越教育大学附属図書館と相互協力の協定を締結した(別添資料B-1-①-9)。平成21年度には、この締結内容の実質化を進め、両大学の利用者の貸出図書冊数や文献複写料金を互いの学部学生並みにするなど、利便性向上を図った(別添資料B-1-①-10)。

別添資料B-1-①-7	新潟県立看護大学図書館利用規程 第2条(利用者の範囲)など
別添資料B-1-①-8	新潟県立看護大学図書館学外利用者要領
別添資料B-1-①-9	上越教育大学附属図書館と新潟県立看護大学図書館との相互協力に関する交流協定書
別添資料B-1-①-10	新潟県立看護大学図書館文献複写取扱要領

〔6〕 地域への情報発信

本学の建学の理念である「ゆうゆうくらしづくり」にもとづき、県民のくらしに融け込み、各地のヘルスケアのニーズにバイタリティをもって独自の・創造的に取り組み、かつ、自由と自律の精神をもって、教育・研究にゆうゆうと励み、地域とともに発展することを目的に、平成16年度から地方新聞の地域特別版に「看護大通信」を月1回連載し、平成22年3月で通算66回となった。記事の内容は看護から医療全般にわたる様々な話題についてであり、一般市民にもわかりやすい平易な表現で解説している。執筆は本学教員がリレー方式で担当し、各自の専門領域の紹介、身近な病気への対応法、あるいは地域特有の話題を取り上げている（別添資料B-1-①-11）。

別添資料B-1-①-11 看護大通信 65号「日本赤十字篤志看護婦人会(最終回)新潟支会高田分会の活動」

【分析結果とその根拠理由】

〔1〕～〔6〕の各事業についてそれぞれ適する組織編成を行い、目的に照らした内容の企画を立案し実践してきた。特に看護研究交流センター生涯学習・研修支援事業と文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プロジェクト」採択の「ドコカレ」プロジェクトを強力に推進してきた。これらの取り組みの基盤となるITのインフラ整備は、同センターのIT推進部会を中心に推し進め、これらを活用した広報活動も活発に行われた。またこれらの専門的な事業とは若干趣を変え、医療者と一般住民が気楽に本音を出し合って語り合える「いきいきサロン」を開始し、健康と病気に関する地域へのサービスと同時に、地域住民との交流の場として活用されている。したがって本大学の建学の理念と使命にもとづいて、正規課程の学生以外に対する教育サービスの目的を達成するための取り組みが、適切に計画され具体的方針が定められ、周知されていると判断する。

観点B-1-②： 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

【観点到に係る状況】

〔1〕 科目履修生等の受入

大学院における科目等履修生の受入状況は、資料B-2-4のとおりである。出願資格審査の結果、応募者全員を受け入れた。学部の科目等履修生の出願は今までのところない。

資料 B-2-4 大学院 科目等履修生の受講状況

科目名	単位数	受講者数	受講年度	学生数
がん看護学特論Ⅱ	2	2	20	3
がん看護学特論Ⅲ	2	2	20	
がん看護学演習Ⅱ	1	2	20	
がん看護学演習Ⅲ	2	2	20	
病態治療学	2	1	20	
病態治療学特論	1	1	20	
運動機能障害学特論	1	1	20	
老年看護援助展開論	2	1	21	1
学校保健・養護教育展開論	1	1	21	

〔2〕公開講座等の開講

(1) 特別講演および公開講座は、開学以来資料B-2-5のとおり実施されてきた。

特別講演は、本学と本学を取り巻く医療と福祉の現状の中から話題性の高いテーマと演者を選び実施した。一般公開講座は、健康と看護および老いをテーマに広く一般の県民、市民を対象に開講された。専門公開講座は、主として看護職者およびその他の医療・福祉関係の職業従事者を対象に、より専門的なテーマをかかげ、参加者の専門性をより高めることを目的に開講された。テーマによっては、情報演習室、LL 教室など特別教室を活用し、少人数でのセミナー方式が採用された。その他、地域からの要請に答え、出前講座と研修支援を行った。各講座の概要は、本学ホームページ (<http://www.niigata-cn.ac.jp/index2.htm>) および毎年発行されている看護研究交流センター年報に報告されている(別添資料B-1-②-1)。

別添資料 B-1-②-1 新潟県立看護大学 平成 20 年度看護研究交流センター 年報 平成 21 年 9 月
生涯学習・研修支援部会報告 P16～P18

資料B-2-5 平成14～21年度に開講された公開講座等

年度	特別講演	一般公開講座	専門公開講座	その他	延べ参加者(名)
平成 14 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・開学記念講演「国際共生の時代のために」 ・鼎談「共生時代の医療とケアを考える」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「女性と看護」 (6 回) ・回想法グループの実際と評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護英会話夏期セミナー (2 回) ・看護情報処理冬期セミナー (2 回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・出前講座 (11 回) ・研修支援 (2 回) 	約 900
平成 15 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・開学 2 周年記念講演「地域に根ざした看護の発展をめざして」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「看護とジェンダー」 (5 回) ・「サクセスフルエイジングへの挑戦」 (6 回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護研究の基礎知識 ・看護英会話夏期セミナー (2 回) ・看護情報処理冬期セミナー (2 回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・出前講座 (3 回) 	648
平成 16 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「看護政策の課題と展望」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ナイチンゲールの時代から現代看護を読む」 (4 回) ・「サクセスフルエイジングへの挑戦」 (8 回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護研究の基礎知識 ・看護研究ステップアップコース ・看護英会話夏期セミナー (2 回) ・看護情報処理冬期セミナー (3 回) ・新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会 	<ul style="list-style-type: none"> ・出前講座 (2 回) 	882
平成 17 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「自らの歩みから得た看護観を通して看護技術の意味を問う」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「海外の看護と日本の看護」 (6 回) ・「サクセスフルエイジングへの挑戦」 (8 回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護研究の基礎知識 ・看護研究ステップアップコース ・看護英会話セミナー (2 回) ・看護情報処理冬期セミナー 	なし	799

			(2回) ・新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会		
平成18年度	・「高齢化社会を乗り切る健康観を見通そう」	・「スローエイジングへの挑戦」(5回) ・「認知症サポーター100万人キャラバン(メイト養成講座)」(5回)	・「職場で育つもの育たないもの」 ・看護英会話セミナー(2回) ・看護情報処理冬期セミナー(2回) ・新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会	なし	775
平成19年度	・「看護教育と大学教育の将来」 ・「大災害と国際医療支援の実際」	・「魅惑のスローライフ・スローエイジング」(6回) ・「認知症サポーター100万人キャラバン(メイト養成講座)」(5回)	・看護英会話セミナー ・看護情報処理セミナー(2回) ・新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会	なし	985
平成20年度	・「看護師の臨床の『知』と、看護師が経験を積むことの意味」 ・「感染制御に関する新しい動き」	なし	・「高齢者の口腔ケア」 ・「看護と栄養管理」 ・「看護と口腔ケア」 ・医療安全セミナー ・看護情報処理セミナー(2回)	なし	521
平成21年度	・学長就任記念講演「生涯教育について」 ・「ヒューマン・ケアリングの意味と価値」	・「災害時医療従事者合同研修会」	・「看護の役割拡大の可能性」 米国における専門看護師(ナース・プラクティショナー)活動の実践から ・看護情報処理セミナー(2回) ・「最新の糖尿病ケア」 ・「最新の薬剤適用と管理」 ・「医療をめぐる変化と看護の動向」 ・「人とのコミュニケーション」 ・「最新の経管栄養・胃ろう患者ケア」 ・「わかりやすい! 排尿障害のアセスメントとケアのポイント」	なし	706

(2) 「看護大いきいきサロン」

地域貢献事業の一つとして平成21年度から開始した。対象は地域住民で、お茶を飲みながら話をするという気楽な雰囲気の中ですでに4回開講した(資料B-2-6)。テーマと話題提供者に関しては、本学看護研究交流センターの地域社会貢献部門が中心に検討し決定してきた。サロンのテーマは、できるだけ地域住民の関心が高い健康や病気に関するものを取り上げ、話題提供者には、日常生活の中で地域の人々が受診しているホームドクターあるいは医療関係者を招聘し、医療サービスを提供する側とされる側が情報を交換し、交流する機会となるよう計画した。

資料B-2-6 「看護大いきいきサロン」のテーマと参加者数

回	月日	テーマ	参加者数
第1回	平成21年9月28日	「眼科における最近の話題」	69
第2回	平成21年10月19日	「生き生き脳活性化のひと工夫～認知症の予防とケア～」	87
第3回	平成21年11月25日	「ちょっと人には話せないおしっこの話～前立腺肥大と女性の尿失禁」	67
第4回	平成21年12月17日	「患者として医療者とどうつきあうかー33年間の透析患者としての体験からー」	100

[3] 研修支援

平成16～19年度には本学の看護研究交流センター生涯学習・研修支援事業の一つとして、新潟県臨地実習指導者養成講習会の企画・運営を県と連携して行った。指定された240時間のプログラムは、単なる講習会としてではなく、大学教育の内容と過程を重視した授業として生まれ、大学で学ぶ意義を盛り込んだ。講師陣は、本学の看護系教員を中心に編成し、一部の科目については他大学の非常勤講師で対応した。また、本学学部講義の聴講や看護研究交流センター主催の公開講座への参加も講習の一部とした(別添資料B-1-②-2)。

当該講習会は、平成20年度から新潟県福祉保健部が運営することになり、現在本学では実施されていないが、本学教員の派遣や運営上の助言をするなど支援を継続している。

別添資料 B-1-②-2 平成19年度 新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会集録、
P140～144 同講習会実施要領

[4] 「ドコカレ」プロジェクト

本プロジェクト推進のため、看護系教員9名、共通科目教員3名からなるプロジェクトチームを編成した。平成19年度は計画立案とシステムの準備、および広報活動を主として行った。新潟県内の各病院をはじめ、関連施設をくまなく訪問し、本プロジェクトの説明と受講生の勧誘活動を行った。また同時にパンフレット(別添資料B-1-①-5)の配布と新聞広告、本学ホームページでの紹介を行った(資料B-2-1)。

平成21年度までに「ドコカレ」で提供した科目は24科目、テスト機能を備えた第87回から97回までの看護師国家試験CBTが15件を数えた(資料B-2-7、http://dokokare.nirin.jp/2_/22_/)。また提供されたマルチメディアは52件であった(資料B-2-8)。同時に、スクーリングと交流の場を兼ねた「オープン・カレッジ」を開校し、10講義科目を公開した(資料B-2-9)。また、専門家を招いての公開講座を本学看護研究交流センターと共催で企画し、平成20年度7講座、平成21年度は6講座を開講した(資料B-2-10)。これらの講

座は一般公開講座として、ドコカレの受講生（メイトと呼ぶ）や看護関係者のみならず広く県民にも呼びかけ、最多で164名の参加者を得た。

資料B-2-7 「ドコカレ」バーチャル・カレッジ 科目一覧

	講習又は授業科目の名称		講習又は授業科目の名称		講習又は授業科目の名称
1	臨床病理学	15	看護情報統計	30	CBT第94回保健師国家試験
2	保健統計演習	16	看護情報処理セミナー	31	CBT第94回看護師国家試験
3	精神看護学演習	17	看護師の臨床と『知』と、看護師が経験を積むことの意味	32	CBT第93回保健師国家試験
4	情報処理演習	18	【講演】看護と口腔ケア	33	CBT第93回看護師国家試験
5	情報科学	19	【講演】看護と栄養管理	34	CBT第92回保健師国家試験
6	看護師が経験を積むことの意味	20	【講演】感染制御に関する新しい動き	35	CBT第91回保健師国家試験
7	基礎看護技術-注射法	22	【講演】医療情報システム	36	CBT第91回助産師国家試験
8	基礎看護技術-体位変換移乗・移送-	23	【講演】医療安全セミナー	37	CBT第90回保健師国家試験
9	基礎看護技術-静脈血採血	24	【講演】メタヴァイン学習会	38	CBT第90回助産師国家試験
10	基礎看護技術-感染予防	25	ドコカレ操作入門	39	CBT第89回助産師国家試験
11	基礎看護技術-ベッドメイキング・リネン交換-	26	ドコカレ操作入門2	40	CBT第88回助産師国家試験
12	基礎看護技術-バイタルサインの測定と観察	27	CBT第97回看護師国家試験	41	CBT第87回助産師国家試験
13	基礎ゼミ3	28	CBT第96回看護師国家試験		
14	看護情報統計	29	CBT第95回看護師国家試験		

資料B-2-8 「ドコカレ」バーチャル・カレッジで提供されたマルチメディア

	タイトル		タイトル
1	高血圧（2）（35' 37）	27	肺結核（31' 08）
2	高血圧（2）（35' 37）	28	肺がん（39' 54）
3	高血圧1（37' 02）	29	閉塞性肺疾患・在宅酸素療法（23' 10）
4	高脂血症（脂質異常症）・高尿酸血症（40' 21）	30	看護と栄養管理(非公開)
5	高脂血症（脂質異常症）・高尿酸血症（40' 21）	31	看護師の臨床と『知』と、看護師が経験を積むことの意味（36' 37）
6	生活習慣病（1）（35' 11）	32	看護師の臨床と『知』と、看護師が経験を積むことの意味（27' 32）
7	高血圧1（37' 02）	33	看護師の臨床と『知』と、看護師が経験を積むことの意味（25' 16）
8	高血圧（2）（35' 37）	34	看護師の臨床と『知』と、看護師が経験を積むことの意味（43' 35）
9	生活習慣病（2）（28' 53）	35	感染症（39' 46）
10	医療情報1	36	感染制御に関する新しい動き（40. 06）
11	医療情報2	37	感染制御に関する新しい動き（37. 18）
12	バイタルサインとショック（38' 41）	38	感染制御に関する新しい動き（37. 44）
13	冠状動脈硬化症（35' 07）	39	感染制御に関する新しい動き（37. 18）

14	虚血・壊死・循環障害・動脈硬化 (43' 58)	40	感染制御に関する新しい動き (37. 44)
15	胸痛・息切れ・呼吸困難・動悸 (44' 48)	41	糖尿病 (1) (33' 45)
16	不整脈1 (36' 47)	42	糖尿病 (2) (33' 00)
17	不整脈2 (22' 43)	43	看護と口腔ケア 1
18	心電図1 (31' 19)	44	看護と口腔ケア 2
19	心電図2 (18' 45)	45	看護と口腔ケア 3
20	炎症と体温調節 (25' 16)	46	メタヴァイン学習会
21	感染防御機構 (26' 09)	47	基礎看護技術-注射法
22	ウイルス感染症 (エイズ) (25' 25)	48	バイタルサインの測定と観察-
23	ウイルス感染症 (感冒・インフルエンザ) (35' 27)	49	静脈血採血-
24	呼吸器疾患の基礎 1 (23' 59)	50	感染予防-
25	呼吸器疾患の基礎 2 (22' 30)	51	体位変換 移乗・移送-
26	肺炎 (32' 47)	52	ベッドメイキング・リネン交換-

資料B-2-9 「ドコカレ」オープン・カレッジ 講義科目一覧

	領域	科目
平成20年度	基礎医学	臨床病理学
	成人看護学	成人看護学Ⅱ
	老年看護学	老年看護学Ⅱ
平成21年度	基礎医学	臨床病理学
	基礎看護学	看護技術論
		基礎看護学技術演習Ⅰ
		基礎看護学技術演習Ⅱ
	成人看護学	成人看護学Ⅰ
		成人看護学Ⅱ
		成人看護学演習

資料B-2-10 「ドコカレ」オープン・カレッジ 公開講座一覧

年度	開催日		講座名	参加者 (うちメイト数)
平成20年度	7月26日	1)	ドコカレ操作入門	3(3)
	8月6日	2)	医療事故と医療安全管理 ー医療事故をめぐる新しい試みー	72(10)
	8月30日	3)	看護と栄養管理	17(10)
	9月20日	4)	看護師の臨床の「知」と、看護師が経験を積むことの意味	133(4)
	10月4日	5)	感染制御に関する新しい動き	164(6)
	11月29日	6)	看護と口腔ケア	88(3)
	11月30日	7)	高齢者の口腔ケア技術演習	55(3)
平成21年度	5月23日	8)	最新の糖尿病ケア	43(4)
	6月20日	9)	最新の薬剤適用と管理	46(16)

	7月4日	10)	医療をめぐる変化と看護の動向	44(9)
	7月25日	11)	人とのコミュニケーション	40(6)
	8月8日	12)	最新の経管栄養・胃ろう患者ケア	97(13)
	8月23日	13)	わかりやすい！排尿障害のアセスメントとケアのポイント	61(14)

[5] 図書館の開放

図書館の開館時間を20時30分まで、また土曜日でも9時から16時30分まで開館するなど、開館時間の延長に勤め、勤務している社会人でも利用できるように配慮している。また、図書館ホームページを通して利用案内(別添資料B-1-②-3)などの情報提供をしている(<http://lib.niigata-cn.ac.jp/>)。また、利用頻度の高い近隣の病院には、開館状況のアナウンスを届けたり、本学図書館が発行している「図書館だより(別添資料B-1-②-4)」を配布したりして、情報発信に努めている。来館者には、利用申込書に必要な事項を記入してもらい、学内職員が着用しているネームプレートと色の異なるプレートを着用してもらっている。

別添資料B-1-②-3	新潟県立看護大学図書館利用案内
別添資料B-1-②-4	図書館だより No. 25 (2009. 7)

[6] 地域への情報発信

地方紙への「看護大通信」は、広報委員会が担当し年間執筆者の選定、執筆内容の依頼等、計画的に実施している。通信の内容は医療に関する最近の話題が多いが、かならずしもそれらにこだわらず、地域の話題、各執筆者の専門分野に関すること、自身の研究の紹介、あるいは大学の話題など多彩である。一般市民でもわかるように平易な文章と話題性にも心がけている。平成21年度の掲載記事一覧を資料B-2-11に示した。

資料B-2-11 平成21年度の「看護大通信」一覧

連載回	掲載年月日	タイトル	執筆者	所属
66	平成22年3月6日	「かんずり」の思わぬ効用	境原三津夫 教授	生物・医学領域(自然科学)
65	平成22年2月6日	日本赤十字篤志看護婦人会(最終回)新潟支会高田分会の活動	堀 良子 教授	基礎看護学領域(看護技術学)
64	平成22年1月3日	日本赤十字篤志看護婦人会(その2)結成の主旨とその活動	堀 良子 教授	基礎看護学領域(看護技術学)
63	平成21年12月5日	日本赤十字篤志看護婦人会(その1)誕生の背景	堀 良子 教授	基礎看護学領域(看護技術学)
62	平成21年11月7日	高齢者が入院した時の混乱状態について	菅原峰子 助教	地域生活看護学領域(老年看護学)
61	平成21年10月3日	開業してしごとをしている助産師もいます	高島葉子 講師	臨床看護学領域(助産学)
60	平成21年9月5日	こころの相談、どうしてますか?	鈴木香苗 助手	地域生活看護学領域(精神看護学)
59	平成21年8月1日	胃がんの予防	角山裕美子 助教	地域生活看護学領域(老年看護学)
58	平成21年7月4日	助産師目指して学習しています	中島通子 教授	臨床看護学領域(助産学)
57	平成21年6月6日	上越に縁のある「看護界の先駆者大関和」	堀 良子 教授	基礎看護学領域(看護技術学)
56	平成21年5月2日	乳がん検診や自己チェックしていますか?	石岡幸恵 助手	臨床看護学領域(成人看護学)
55	平成21年4月4日	架空請求メール=笑いのネタ?!	永吉雅人 助教	人間環境科学領域(情報科学)

【分析結果とその根拠理由】

[1]～[6]の正規課程の学生以外に対する教育サービスは、そのための各組織が編成され、計画に基づき実施された。大学ホームページ等で広く広報している結果、県民および県外からも参加者が得られている。したがって、計画に基づいた活動が適切に実施されていると考える。

観点B-1-③： 活動の結果及び成果として、活動への参加者が十分に確保されているか。また、活動の実施担当者やサービス享受者等の満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

[1] 科目等履修生の受け入れ

大学院において4名を受け入れた。この中には、大学院で学びたいが職場や家庭の事情により就学環境がまだ整っていない現役看護師もおり、この制度を利用して履修し、単位を取得した。さらにこれを契機に、本学で実施しているドコカレにも参加して、面接と実技による最終試験に合格し修了した。このように、履修生の数は必ずしも多くないが、着実に成果を上げている。

[2] 公開講座等の開講

本学が開講している公開講座等には、一般市民や医療福祉関係者が約500以上、多い時は1000名近く参加している（資料B-2-5）。毎回講座終了後に聴講者に対しアンケート調査を実施しているが、平成21年度の結果の一部は資料B-2-12のとおりである。

資料B-2-12 平成21年度の公開講座等に参加した市民の声

質問内容		特別講演※	専門公開講座※
この講座をどこで知ったか	本学ホームページ	2	3
	本学パンフレット	15	14
	新聞	14	0
	その他	15	1
		46	18
難易度	難しい	0	2
	やや難しい	10	3
	どちらでもない	3	1
	わかり易い	22	7
	大変わかり易い	9	2
		44	15
参加者の感想の一部	<ul style="list-style-type: none"> ・「知る」ということは一つの快感だと実感した。 ・大変わかり易い内容で、高田に来てよかった。 ・これからの自分に生かしていけそうです。 ・もう一回聞きたいと思いました。 ・介護ボランティアをやりたいと思っている私にとって、今日の話は有意義で考えさせられるものでした。 		

※平成21年度に実施した特別講演2題および専門公開講座「看護情報処理セミナー」におけるアンケート結果を集計した。

[3] 研修支援

新潟県臨地実習指導者養成講習会の定員は50名である。そのうち10名を本学の実習病院枠とした。年度ごとの受講生は資料B-2-13のとおりであり、過去241名の講習生（看護師）を送り出した。講習会の内容と成果をまとめ、関係各所に配布・公開している（別添資料 B-1-②-2）。講習会の最後には受講生の満足度や意見をアンケートによって調査している。たとえば平成19年度の調査結果の一部は資料B-2-14のとおりである（詳細は別添資料 B-1-③-1）。これらの結果から、講義内容と時間割の組み方、教職員の対応、設備、などについて改善を求める意見や、話の内容が実践的でないという意見もあったが、全体を通しての意見からは十分成果が上がっていると考えられた。

資料B-2-13 臨地実習指導者養成講習会の受講生

年度	受講者総数（名）	本学実習施設からの受講者数（名）
15	40	4
16	50	5
17	50	3
18	50	7
19	51	8

資料B-2-14

平成19年度 臨地実習指導者養成講習会受講生へのアンケート調査結果の一部

	適当	不适当
開催時期	50	0
開催期間	49	1
時間割	12	38
特に良かった科目ベスト5	1. 「教育方法とその評価」 2. 「教育心理」 3. 「楽しく学ぶ情報処理」 4. 「フィジカルアセスメント」 5. 「看護技術の検証とその実践的計画」	
臨地実習について良かった点	<ul style="list-style-type: none"> 指導者や教員の学生へのかかわり方を見ることができたこと 学生の声が聞けたこと カンファレンスに出席できたこと 	
同上について悪かった点	<ul style="list-style-type: none"> 期間が長い 教員の対応 受講生の居場所がない 	
講習会全体を通しての意見	<ul style="list-style-type: none"> 多くのことを学べた 学ぶ良いきっかけになった 大学で学ぶことでいろいろな設備を使うことができた 教員の様々な講義を聞くことができた これまでの看護を振り返る機会になった 自分自身を見つめ直す良い機会となった 実習指導に関する考えが変わった 近隣の病院の研修者と情報交換ができた 実習指導者として自信が持てた 	

別添資料B-1-③-1 平成19年度 新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会講習者のアンケート結果

〔4〕ドコカレプロジェクト

ドコカレの受講生（“メイト”と呼ぶ）は、新潟県内在住者を中心に2年間で67名に達した（資料B-2-15）。またドコカレのWebサイトへのアクセス件数は、平成20年度は約160万件、平成21年度は約256万件（平成22年1月現在）に達した（資料B-2-16）。またメイトの科目別学習状況も、科目別アクセス件数によって明瞭に示される。それによると、臨床病理学へのアクセス件数が最も多く490件、その次に多いのが血圧測定や注射法など看護技術に関する科目であった（資料B-2-17）。これらのことから医学と看護技術についての学び直しの要望が高かったことが示された。また、平成20年度にメイトに対して行った調査では、eラーニングや再就職に役立つことへの期待から受講生が応募してきたことがうかがわれる（資料B-2-18）。

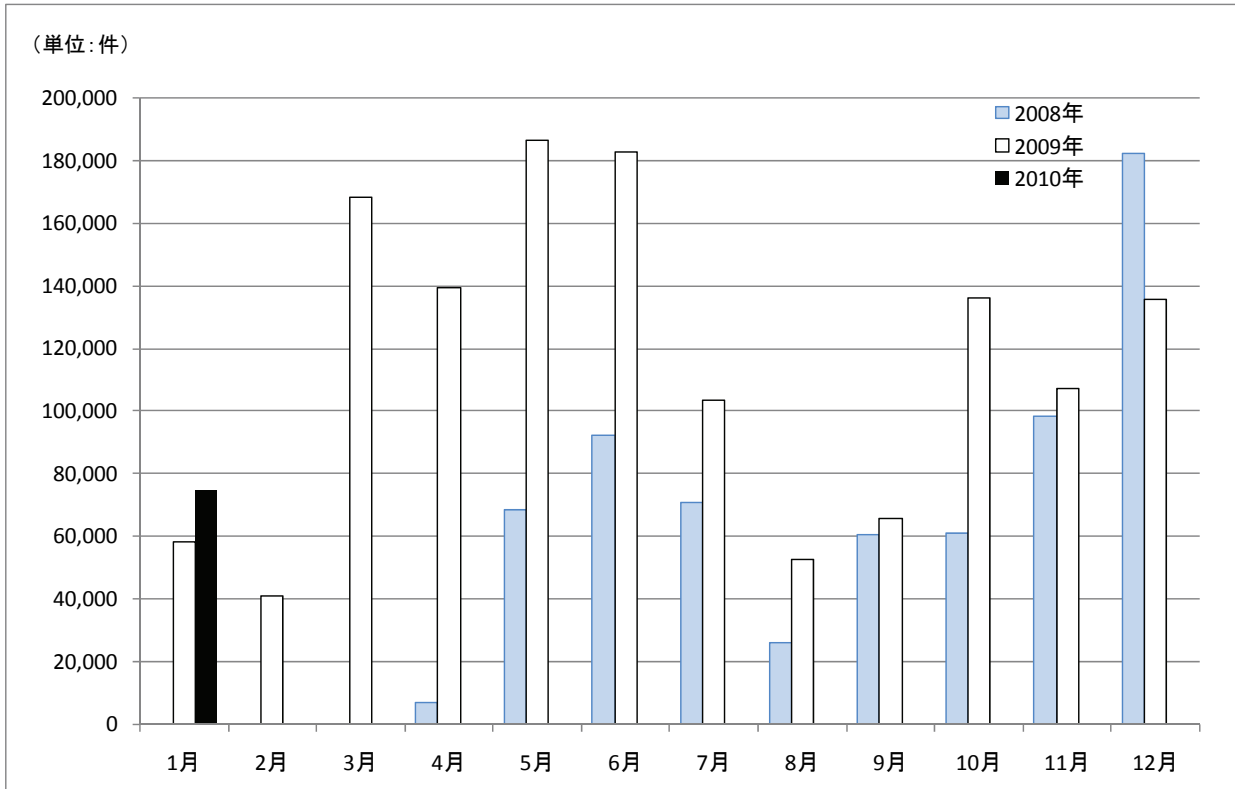
本プロジェクト最終年度末の平成22年2月6日には、修了要件（講義科目6単位、看護演習2単位、施設実習2単位、計10単位）を満たし、最終試験に合格した11名に対し「修了認定証」を授与した（別添資料B-1-③-3）。このことは、報道機関においても大きく取り上げられ、ITを活用した新しい教育システムとして、地域から大きな期待が寄せられた（別添資料B-1-③-4、-5）。同日には、学外評価委員の出席を得て本事業評価最終会議およびパネルディスカッションが開催された（別添資料B-1-③-2）。学外評価委員からは、院内教育が難しい状況にある小規模施設や介護施設の方々に、本プロジェクトの存在をアピールしていただくことよいか、という意見が出された。また、本事業の再就職先を急性期以外に絞る必要性も指摘された。本プロジェクトへの登録時に「看護師以外の仕事をしていた」または「収入を得る仕事をしていなかった」メイトのうち3名が、プロジェクト終了時に病棟看護、施設看護、その他の職種で再就職を果たした。看護職という仕事に対する不安については、登録前には71.4%のメイトが「不安あるいはやや不安」と答えていたが、参加後は60%が「まあまあ解決」と答え、本プロジェクトが有効に機能したことを裏付ける結果であった（資料B-2-19）。メイトの総合評価では、本プログラムに参加して看護職として必要な知識に自信が持てるようになった者は66.7%、学習意欲が向上した者は87.6%であった。一方、看護技術に自信が持てるようになったと答えた者は35.7%と低い値を示し、具体的な技術指導に課題を残した（資料B-2-20）。本プログラム全般に対しては「今後も継続してほしい」「学び続けていきたい」「ドコカレがなければ、学習する場もなく、再就職はできなかったと思う」「一歩踏み出す勇気を頂けた」など、高い評価と前向きな姿勢が読み取れた（資料B-2-21、別添資料B-1-③-5）。

本プロジェクトは平成21年度をもって終了したが、平成22年度からは本学の看護研究交流センターにおいて「看護職学習支援部門」を設置してこの事業を継続していくこととなっている。

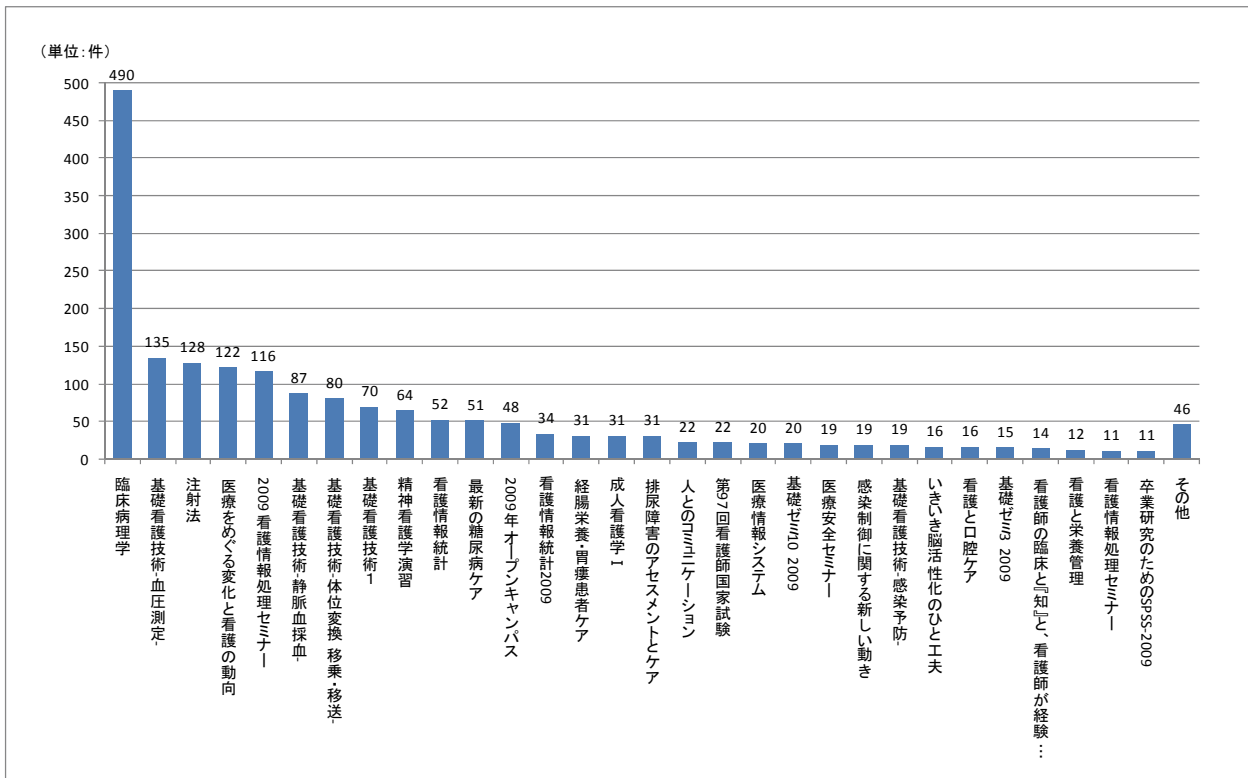
資料B-2-15 「ドコカレ」メイトの登録状況（平成22年1月現在）（名）

登録年度	登録者	新潟県内在住	新潟県外在住
20	26	24	2
21	41	39	2
合計	67	63	4

資料B-2-16 バーチャル・カレッジへのアクセス件数（ゲストユーザ含む）



資料B-2-17 「ドコカレ」メイトの科目別学習状況（アクセス件数）



資料B-2-18 平成21年度 メイトへの調査結果の一部

質問内容	回答内容 (回答数)
ドコカレを知ったきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポスターを見て(8) ・ 公開講座を調べていて(4) ・ 知り合いに勧められて(1) ・ 報道等を見て(5)
ドコカレの受講動機	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講したい講座があった(12) ・ eラーニングなど自宅学習できる(6) ・ 自宅から通いやすい(6) ・ 双方向通信、大学との情報交換(1) ・ その他(1)
ドコカレに期待していること	<ul style="list-style-type: none"> ・ 看護の知識・技術の向上(17) ・ 再就職や転職に対する不安軽減(10) ・ キャリアアップ(3) ・ 仲間づくり、情報交換(3) ・ 一般教養を高める(2) ・ 再就職や転職の際の自己アピールに(1)

資料B-2-19 ドコカレ参加前の看護に対する不安

看護に対する不安	n (%)
不安があった	9 (64.3)
やや不安があった	1 (7.1)
あまり不安はなかった	4 (28.6)
不安はなかった	0 (0.0)
合計	14 (100.0)

資料B-2-20 ドコカレ参加後の看護に対する不安の解決

不安の解決	N (%)
解決した	0 (00)
まあまあ解決した	6 (60)
あまり解決していない	3 (30)
解決していない	1 (10)
合計	10 (100)

資料B-2-21 ドコカレイトによる総合評価

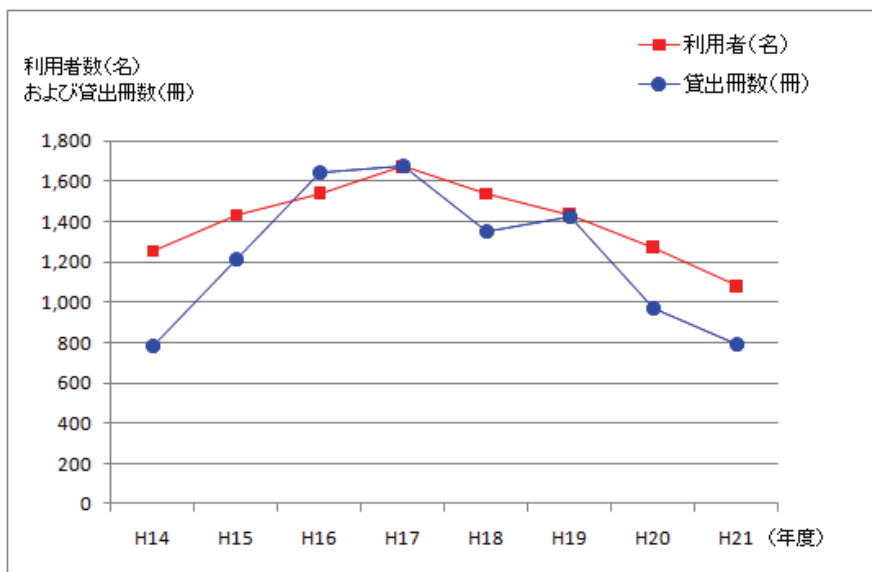
質問内容	そう思う	まあそう思う	あまりそう思 わない	そう思わない	計
	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)
問1. 看護職として必要な知識に自信が持てるようになった	1 (6.7)	9 (60.0)	5 (33.3)	0 (0.0)	15 (100)
問2. 看護技術に自信が持てるようになった	1 (7.1)	4 (28.6)	9 (64.3)	0 (0.0)	14 (100)
問3. 学習意欲が向上した	5 (33.3)	8 (54.3)	2 (13.3)	0 (0.0)	15 (100)
問4. 熱意を持って学習に取り組むことができた	3 (21.4)	9 (64.3)	2 (14.3)	0 (0.0)	14 (100)
問5. 自己学習を十分に行った	1 (6.7)	4 (26.7)	5 (33.3)	5 (33.3)	15 (100)
問6. インターネットを利用して学習することへの抵抗感が減少した	2 (13.3)	4 (26.7)	4 (26.7)	5 (33.3)	15 (100)
問7. (現職者への質問) 今後も看護職を続けたいという思いが強くなった	3 (33.3)	6 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (100)
問8. (看護職をしていない者への質問) 今後も看護職を続けたいという思いが強くなった	2 (33.3)	1 (16.7)	3 (50.0)	0 (0.0)	6 (100)
問9. 参加してよかった	11 (73.3)	3 (20.0)	1 (6.7)	0 (0.0)	15 (100)

- 別添資料B-1-③-2 「看護師の学び直しを支援する地域指向型オープン/バーチャル・カレッジの試み」
平成21年度成果報告書 P52～P62
- 別添資料B-1-③-3 「ドコカレ修了認定証授与式、事業評価会議 次第」及び「案内文書」
- 別添資料B-1-③-4 平成22年2月10日「上越タイムス」紙面14
- 別添資料B-1-③-5 平成22年2月20日「新潟日報」紙面

〔5〕図書館の開放については

学外利用者数は、平成17年度が最も高く1,674名であったが、最近は減少している（資料B-2-19）。利用者の多くは地元病院勤務の看護師であるが、その他の医療関係者の利用も多い。一般市民の利用は少ないが、このことは、本学図書館が学外者の利用目的をある程度限定していること、また本学図書館が看護の専門図書館を目指しているために一般図書が少ないこと、などが原因と考えられる。しかしもっとも大きな原因は、臨地実習指導者養成講習会が平成20年度から本学で開催されなくなったため、と考えられる。

資料B-2-19 学外利用者数とその利用状況の推移



[6] 地域への情報発信

新潟県の地方紙「新潟日報」が発行している上越地方をカバーする発行部数3万部の「NICかわらばん」に掲載している記事について、毎回のように読后感想が編集局に寄せられており、多くの市民の関心の高さがうかがわれた(資料B-2-20)。

資料B-2-20 本学に寄せられた読者の声の一部(平成21年度)

- ・ 看護大通信、勉強になります。(34歳、女性)
- ・ 看護大通信は健康管理にとっても役立っています。(68歳、男性)
- ・ 知ることって大事ですね。もし私がそのことがわかっていたら、誰かが困っているとき教えてあげたいです。(61歳、女性)
- ・ 看護大通信で自分の健康を守りたいと思って毎回楽しみにしています。(58歳、男性)
- ・ 看護大通信楽しみにしています。今回医療の歴史を読み、医療に携わった者として、上越に縁のある看護界の先駆者大関和氏のこと感銘を受けました。(59歳、女性)
- ・ 今回の看護大通信の記事に感銘を受けました。ノロウイルスについての注意事項、予防法、加熱調理法、嘔吐物の処理方法など大変有意義なテーマでした。(68歳、女性)

【分析結果とその根拠理由】

大学の設置されている新潟県上越市の人口が約21万人という規模を考慮すると、活動への参加者が適切に得られていると考えられる。一方、「ドコカレ」のオープン/バーチャル・カレッジへの参加は時間とともに応募者が増え、地理的ハンディを乗り越えたIT環境の強みが遺憾なく発揮されたといえる。また公開講座等には多数の看護職現任者が学び、その受講生から満足度の高い評価を得ていることと、そして更なる継続の要望が聞かれたことは、地域貢献が果たされていると同時に、地域から大いに期待されている証と受け取ることができた。

これらのことから、活動の成果が上がっていると判断する。

観点B-1-④： 改善のための取組が行われているか。**【観点に係る状況】**

[1] の科目等履修生の受け入れについては、大学院の教学小委員会で受入科目の妥当性等を検討している。

[2] ～ [4] の取り組みでは、常に受講生へのアンケート調査が実施されており、その集計結果を担当部署で検討し、次回からの改善を心がけている。特に[4]の「ドコカレ」プロジェクトについては、メイトの修了証授与式の後、近隣病院看護部長、社会福祉法人勤務の看護師による学外評価を受け、さらに参加者によるパネルディスカッションを実施し、今後の取組への課題等について話し合われた。またメイトに対してはプログラム終了時アンケート調査を実施した（別添資料B-1-③-5）。これらの結果を受け、平成22年度からは本学看護研究交流センターの一部門において、事業内容の改善と継続を図っている。

[5] の図書館については、図書館入り口に「意見箱」を設置し、常に利用者の声に耳を傾けるようにしている。また「図書館だより」には、学外利用者の声を掲載するなど、利用に関する相互理解を深めることに心がけている。また、リポジトリの構築に向け努力している。

[6] に関しては、連載記事の電子化と大学ホームページへの公開を進めているところである。

【分析結果とその根拠理由】

以上のような状況から、[1] の取り組みについてはやや不十分であり、今後改善への取り組みが必要である。それ以外は、改善への取り組みは適切に行われていると判断する。

（2）目的の達成状況の判断

目的の達成状況は良好である。

（3）優れた点及び改善を要する点**【優れた点】**

1. 公開講座を、一般と専門に分けて行うなど、それぞれの聴講者のニーズに応じた取り組みがなされていること。
2. 現代のITの発達を活用した「ドコカレ」プロジェクトは、ユビキタス環境を創出し（バーチャル・カレッジ）、多くの社会人の学び直しニーズに応えていること。
3. 同時に、受講生が本学に直接出向き、在籍学生と一緒に学ぶことができる機会（オープン・カレッジ）を設けるなど、受講生に対して多様なサービスを展開していること。
4. 特に医療保健福祉関係者に対し図書館を開放し、看護の専門図書館としての役割を果たそうとしていること。
5. 常に大学を取り巻く地域を意識し、公開と情報発信を心がけていること。

【改善を要する点】

科目等履修生、研究生、聴講生、留学生の積極的な受け入れ体制を整備することが必要である。

（4）選択的評価事項Bの自己評価の概要

本学の建学の理念と使命は、常に「県民のくらし」と「地域」に向けられ、大学における「看護科学の考究」を目指す教育と研究活動も、「地域に根ざした・・・」と位置づけられている。このことは決して本学に限らず、現代の大学の一般的使命ともいえる。本学は、このことを強く意識し、開学当初より「看護研究交流センター」を設置し、その活動を通してこれらの使命を果たしてきている。本学の正規課程の学生以外に対する教育サービ

スの内容は、看護という限定された分野を中心にしたものではあるが、昨今の健康意識の高揚に伴い、地方都市にもかかわらず多くの一般市民の受講生を受け入れている。これらの公開講座開講に際しては、参加者へのアンケート調査を実施し、県民からの意見や批判を率直に受け入れ改善に心がけている。幸い「ドコカレ」プロジェクトをはじめ、多くの公開講座、講習会に対し高い評価を得ている。また受講生が本学の教員や学生から刺激を受けると同時に、本学学生がこのような向学心に燃えた正規課程の学生以外の社会人とともに学ぶ機会を与えられることは、学生にとっても大きな刺激となり、学習意欲の向上への相互作用が期待される。今後もこのような取り組みの継続が必要である。